会報第２号　平成２２年秋季

カンボジアの青い空

富山県カンボジア王国親善協会

事務局・富山市小中１６３番地
阪神化成工業株式会社内
T 076-429-1865　F 429-6042
発行責任者　中村政勝
事務局担当　石黒美和

ますます身近なカンボジア報告

富山県カンボジア王国親善協会・会長
阪神化成工業㈱　代表取締役社長　**高田順一**

今年の夏は摂氏３５度を超す猛暑日が続き大変な暑さでしたが、皆様にはますますお元気でお過ごしのこととお喜びを申し上げます。

カンボジアでは乾季には摂氏４０度にもなるようです。私たちがプノンペンとシェムリ・アップを訪ねました２月中旬も連日青空が広がる乾季でした。今回は北日本新聞社河合隆社長を名誉団長とし、総勢２１名が参加しました。翌日はメコン川を渡りプノンペンの対岸にある学校を訪問し図書やサッカーボールを寄贈しました。今回の訪問の主目的は生徒さんたちとの交流でした。新聞紙を使って兜を折る授業や、ポスターやカレンダーを使って富山や日本の自然を紹介する授業をいたしました。子どもたちは目を輝かせて話を聞いてくれました。夜には日本国特命全権大使黒木雅文様をお迎えして夕食会を開催しカンボジアに関する講義をいただきました。

平成22年2月15日　**日本の地理風景の授業**
高田団長は、クメール語で高等学校の先生に変身。

４月にはカンボジア王国特命全権大使ホー・モニロットご夫妻をお迎えして当協会の総会を開催いたしました。大使ご夫妻は２泊３日の日程で富山に滞在され、富山県、富山市に対する表敬訪問や北日本新聞社初め企業訪問をされました。そのほか農業試験場などの施設や富山県水墨美術館を見学されました。帰路は立山アルペンルートを通り信濃大町から東京に戻られました。当日は雲ひとつない真っ青な空の下に純白の立山連邦が輝く絶好の天気となりました。雪の大谷には氷の壁がそびえご夫妻は大変驚いていらっしゃいました。大観峰、黒部ダムの景色もすばらしく富山の自然を満喫していただきました。

平成22年4月23日　**北日本新聞社訪問**
右より河合隆社長、ホー大使、奥様、秘書。

５月中旬にカンボジア王国のノロドム・シハモニ国王が日本を公式訪問されました。カンボジア大使館から当協会に国王の歓迎式典への招待状が参りましたので、私たち夫婦が参加しました。
５月１７日歓迎式典が皇居で行われました。天皇皇后両陛下に続いて鳩山内閣総理大臣、衆参議院議長、閣僚、皇族の方々が入場され、その後自衛隊の音楽隊の演奏の中、シハモニ国王が入場されました。セレモニーではモニロット大使が国王の先導役を務められました。この日も大変暑い日で厳しい日差しの中、私たちは国王に向かって両国の国旗を振っていました。

次回のカンボジア王国訪問は一年ほど間をおいて企画したいと思っております。次回も多くの皆様にご参加いただき、子供さんとの交流を続けていきたいと存じます。

アンコールから世界を見つめて

早稲田大学理工学術院
教授・工学博士　中川　武

1）　アンコール遺跡の何を

日本政府がアンコール遺跡の保存修復のための国際協調体制をつくって、その協力の先頭に立つことになり１９９２年に私は予備調査を始めた。その時考えたことは、アンコールの遺跡の何を、どこまで、どのように、そしてどのような目的のために修復し保存するのか、という原則をはっきりさせようということだった。木や紙の文化財の保存については日本は定評があるが、何故石を？というのが大方の反応だった。しかし文化財の保存とは、その歴史的価値と、劣化原因の究明、オリジナル技術の復原のための粘り強い実験等の努力、それら全プロセスの記録の公開を丁寧に行い修復技術の研究を調和させることが基本であってこの点で私には日本の文化財修理体験があったので自信があった。勿論、文化・環境・国情等に大きな違いがあり、そのままとはいかないが、要は原則を大切にした上での現地の事情との調和であって、それなしには技術移転はできないというのが、改めて私たちなりに学んだことである。アンコール遺跡の倒壊の原因は、大部分、版築基壇内部への雨水の侵入による土の流失が不等沈下を起こすことによる。コンクリートを使わない、消石灰の使用による若干の雨水の浸透を許容した、ゆるやかな土層強化に、私たちはアンコールで初めて成功した。文化遺産のオーセンティシティ(本物らしさ)を保存しながら復原保存するという日本的な文化財保存の考え方が、厳しい環境の中での石造りアンコール遺跡に寧ろ馴染みやすいのではないか、と私たちは近年考えている。

2）　アジアの広がりの中で

私たちの研究室では、エジプト、スリランカ、タイ、ミャンマー、中国南部、インド、ベトナムインドネシア等の調査を続けてきた。アンコール遺跡の修復事業が始まってからも、それとは別に独自な調査研究として他の研究者仲間と協力してインドシナとカンボジア国内全域のアンコール遺跡の調査を並行させている。特にプレ・アンコール(７～９Ｃ)のサンボー・プレイ・クック遺跡や１０Ｃのコー・ケー遺跡、１２～１３Ｃの大プレア・カーン遺跡などはアンコール中心部との関係や独自性の上で、この上なく貴重なものであるがそれらの多くは殆ど崩壊したまま密林の中に埋まり救済の手を待っている。このような姿を眼に焼き付けながら、インドシナ世界においてアンコールとは何であったのか、現在のカンボジア国民にとって、アジアにとって、あるいは日本にとってアンコールとは、と否応なく考えざるを得ないのであるが、逆にそこに世界の新しい思想の可能性もあると今は思っている。

3)アンコール遺跡が発信し続けているもの

近年やや変則的になりつつあるとはいえ、乾季と雨季に分かれるカンボジアでは、照葉樹林系と熱帯雨林系の混在した密林が広がる。記憶を中断させるようなざわめきと容赦のない灼熱の日射が全てを飲み込んでいくような厳しい環境の中で、かって人々が至るところにやさしく頑固とした石造伽藍を求めただろうということが理解される。それらの伽藍は、伝統的、風土的な、不変の生命(自然と土着信仰)と拒むことのできない新しいシンボル(伝来宗教・権力と技術)が併存混在し、静かに浸透していくことの意味を人々に伝えたことであろう。

古代中国の辺境に位置して、選択的に高度な文明を移入し、その洗練を心掛けてきた日本と、インドシナのあわいで、土着と先進の調和的感性を伝え続けてきたアンコール遺跡、私たちのアンコール、ひいてはカンボジアに対する親和感の歴史的根拠は意外に深い。そして、このような文化的洗練の力や調和感こそ現代カンボジアと日本の両国が協力して現代社会に貢献できる共通の基盤であろう。

中川武先生・現地修復現場での説明。
先生は、富山市出身です。

◆本年9月8日に、とやま自遊館での講演に先立ち、無理をお願いし、一筆頂きました。
日本国政府アンコール遺跡救済チーム団長として活躍中！

遺跡群の風景

「やまなみファンド」

やまなみ塾訪問

アンコールやまなみファンド
代表　**多賀正夫**

この広報誌の紙面をお借りして、「アンコールやまなみファンド」の紹介をさせていただけることを、まず感謝いたします。

今年も５月、私たち２９名の仲間とアンコール・クラウ村にある「やまなみ塾」を訪問しました。多くの子どもたちとお母さんがたがわれわれを迎えてくれました。一日目はお互いの挨拶のあと、われわれは「さくらさくら」など日本の歌を唄い、「カエルのうた」を子どもたちと輪唱し、もっともポピュラーな「アラッピア」を一緒に歌って締めくくりました。

また二日目は、子どもたちが英語劇「ももたろう」を演じてくれました。これは昨年から参加の富山県学生寮寮生の指導によるもので、昨年よりまた一段と演技が上手くなって会場を沸かせてくれました。そのあとは三田商会さんのお世話で塾へ届いたオルガンを楽しんだり、絵を描いたり書道に挑戦したり、英会話を試したり、幼い子どもたちは風船細工に興味深々、それぞれに楽しい時間を過ごしました。

このような訪問は四年前の５月、塾の竣工式に始まり今回が五回目になります。昨年は三田商会さんのお力添いで図書室、多目的ホールなどが増築されました。児童数は約１２０名。当会活動の大きなものは年に一度の「塾」訪問。会員はこの訪問を楽しみに待つようになっています。

「アンコールやまなみファンド」の結成は「やまなみ塾」完成の１０ケ月まえ、２００５年７月になります。中川武早大教授が団長をつとめる日本国政府アンコール遺跡救済チームの「アンコール遺跡修復はカンボジア人の手で」という考え、多くの子どもたちは学校へもいけず、みやげ物を売っているという状況が中川教授の同窓生、友人の心を動かし、「子どもたちへの教育支援」「地域との文化交流、友好を深めること」を目的につくられたものです。

会員は現在約１００名、このような活動に賛同し、継続的に活動、協力していただける方を募っています。いっしょに「やまなみ塾」へいってみませんか。

第２回カンボジア訪問報告

セキノ興産株式会社
代表取締役社長　**関野光俊**

２回目になるカンボジア親善訪問旅行に参加させて頂いた。今回は首都プノンペンからメコン川を渡り、土埃のがたがた道を約２時間、メコン流域、カンダール州コンポンチャムにある小中学校と高校を訪問しました。本や文房具、サッカーボール等をプレゼントしたり、子供達に日本の文化風土や歴史、観光ポスターや写真を使い富山の立山連峰や合掌集落も紹介しました。

又、各教室に分かれて日本式の折り紙で兜や飛行機の作り方を教えたり、日本に付いての子供達の質問に応じたりしました。兎に角、勉強が楽しいと云う、夢、希望に溢れる様な澄んだ目の子供達を見ていると私達も、何か心が洗われる様に感じ、今の日本人が失いつつある大切なモノは何か？と云う事も痛感し、そしてこのような交流を何とか続けて行きたいとも感じました。

平成22年2月15日　小学校の生徒に囲まれて
破顔一笑。左から、筆者の関野と、境貞雄さんです。

今回の訪問旅行で得た印象深いもう一つは、カンボジアのごく普通の街や村落の風景、特に土埃道の両側に点在する高床式住宅と牛や犬、鶏を飼いイグサや稲の天日干しが並ぶ長閑な農村の風景が心に残っています。

更に上流は中国、カンボジア、ベトナムを経て大海に注ぐ民族の大河と云われるメコン河を船旅で周航出来た事、両岸に続くそして拡がる漁業者の生活や住宅風景、雨季乾季の河水の大きな落差悠久の自然、水上生活を垣間見、大河の風情を充分に満喫出来た貴重な船旅でした。

平成22年2月15日　サッカーボール寄贈の風景
右から、河合名誉団長、高岸副会長、高田団長。

平成22年2月17日　メコンクルーズからの風景
水上生活者の住居の様子。船中にテレビも有った。

日程表

参加者総数＝２１名

実施日＝平成２２年２月１４日(日)～１８日(木)

１日目
富山空港発～上海見学～プノンペン

２日目
①小学校訪問＝図書・鉛筆等贈呈＆生徒と座談会。
②高校訪問＝サッカーボウル寄贈＆生徒と座談会。
③黒木雅文在カンボジア大使と**講演＆夕食会**。

３日目～４日目
Ａ班＝アンコールワット見学等。
Ｂ班＝州知事訪問＆メコン川クルーズ等。

５日目
上海経由～富山空港着。

Ａ班＝名誉団長・河合隆、伊勢豊彦、伊勢春枝、林益和
高井良一、谷野利一、沖義光、福島治郎、松田隆
宮岸武、松本久介、大割範孝(北日本新聞社)

Ｂ班＝会長・高田順一、高岸和男、関野光俊、野田俊勝
境貞雄、白井紘一、白井妙子、成川栄一、中村政勝

アンコール遺跡修復の文化支援

北日本新聞社経営企画室
経営企画部長・秘書部長　**大割範孝**

Ａ班は観光都市シェムリアップのアンコール遺跡を訪れ、日本国政府アンコール遺跡救済チームの保存修復現場を視察しました。

日本政府の救済チームは１９９４年から現地で活動を始め、現在は１２世紀の王都アンコール・トムの中心施設バイヨン寺院の修復に取り組んでいます。団長を務める富山市出身・中川武早稲田大学教授の特別の計らいで、観光客は立ち入り禁止になっている作業場にも足を踏み入れることができました。

説明をしてくれたのは早稲田大学理工学部アンコールプロジェクト研究室講師の下田一太さん。まだ３３歳の好青年で、単身カンボジアで生活し救済チームに技術顧問として加わっています。

修復現場の中央説明員が
アンコールプロジェクト研究室講師の下田一太さん。

カンボジアは熱帯モンスーン気候のため、強い雨と繁殖力旺盛な植物が遺跡の最大の敵です。雨が石積み内部の土を削り、大木の根っこがアメーバーのように伸び、遺跡を覆っている個所もあります。信じられないことに、あのアンコール遺跡の石積みは接着剤のようなものは何も使われておらず、ただ積んであるだけ。今も雨風で崩れる個所があるそうです。

このため、保存修復作業は一つ一つの石を解体し、下から積みなおすのだそうです。少しのズレでも重なっていけば、上部では大きなズレになってしまい、再び一からやり直しです。かっては日本人の作業をカンボジア人は見ているだけだったそうです。

Ａ班全員の写真です。
２列目・右端が筆者の大割範孝です。

「昔の作り方を保存し再現するのは日本人ならではの修復保存の方法なんです。大切なのは文化を継承すること」

そう語る下田さんの言葉に大きくうなづきました。日本の伊勢神宮が２０年に１度社殿を造り替える式年遷宮によって、弥生建築の様式と建築技術そのものを１３００年の長きにわたって継承していることを思い起こしました。

クメール王朝の隆盛を伝えるアンコール遺跡は１９９２年にユネスコの世界文化遺産に登録されて以降、国際的に保存修復の必要性を訴える声が高まりました。現在フランスやインド、イタリアドイツ、中国なども支援していますが、修復現場によってはコンクリートのような素材で橋が直してあるなど、あまりデリケートではないお国柄が見える個所もあります。

地面からははしごを登って高さ１０メートルほどの場所にあるバイヨン寺院の修復現場に立った時、そこが地面から一層ずつ石を積み上げて再構築された場所だとはとても思えないほど、歴史の風格と重みが漂っていました。日本の遺跡修復技術の高さと文化支援に果たしている役割の大きさを実感しました。

B班　メコン河遊覧の旅景

中日本電産株式会社
代表取締役社長　**野田俊勝**

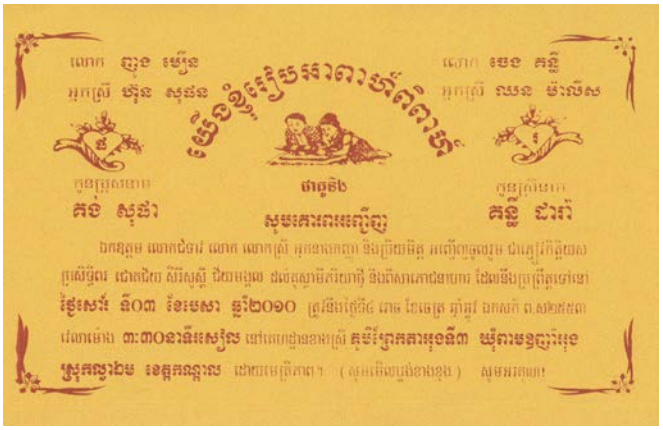
旅の４ケ目、２月１７日、中国青海省の南部、チベット自治区との境界をつくるタン面を源とし全長４２００Ｋｍの大河メコン川を約２時間、川イルカに会えないか淡い期待しつつ遊覧を楽しみました。メコン川から見る王宮がとても素晴らしいものでした。

船内では我々一行とカンボジアさいどの送り出し機関及び日本さいどの受入れ機関のスタッフ、日本から帰った研究生、そしてこれから日本に行くカンボジア人を交えて交流が行われ楽しい一時を過ごすことが出来ました。

メコン川クルーズ遊覧船上にて。
野田先生は現地出張日本語教育中です？

此れから日本に行く研修生の中には日本語の上手なカンボジア人もいてコミュニケーションも図れたと思います。その中に、日本に３年間研修に行っていて2009年７月に帰国した『KUNTHYTARA』というカンボジア人の女性がいました。４月３日に結婚式との事。結婚相手は日本に一緒に行った研修生そして同じ職場だったカンボジア人だそうです。南国特有のフルーツや冷たく冷えたカンボジアのビール、アンコールビールを頂きながら話しがはずみました。(特にマンゴー、ミルクフルーツがとても甘く美味しかったです)

とても暑い日でしたが、船は屋根がついただけのものでクーラーもなく不安でしたが、メコン川からの川風がとても涼しく、約２時間があっという間でした。



下の写真の彼女から送ってきました。
結婚式の招待状かな～？

王宮（1434年　ポンヘヤ・ヤット王によって創建され、1866年にノロドム王がプノンペンに宮殿を築いた。正式には『Preah Barom Reach Veang Chantomuk Mongku』と呼ばれ、４つの川　メコン川上流と下流、バサック川、トンレサップ川の合流点という意味合いを持つそうです。

４０２×４３５メートルの面積がある王宮は塀で囲まれており高い仏塔様式の尖塔がある。王宮はカンボジア国民の象徴としてあがめられ、全ての建造物は黄色と白色で装飾されている。黄色は仏教を表し、白色はバラモン教を表している。）

日本のお父さんと、
カンボジアの新しい娘で～す。

ホー・モニロット大使をお迎えして

三栄樹脂株式会社
代表取締役社長　**長江正憲**

当親善協会が富山に在日カンボジア王国大使をお迎えするのは、一昨年の設立式典以来、今回が二回目となります。特命全権大使に就任されたホー・モニロット大使は初めての来県です。奥様のホー・ソチェット令夫人、第一秘書のチェウィ・ヴィチェットさんが随行され二泊三日の滞在でした。

●初日（４／２３）

富山空港で高田順一会長はじめ役員がお出迎えをし、富山県庁・富山市役所を表敬訪問され、副知事・森市長とそれぞれ懇談されました。更に、北日本新聞社・阪神化成工業・富山県農業研究所と相次いで訪問見学をされました。

●二日目（４／２４）

タイワ精機・富山県水墨美術館を訪問見学され夕刻からの当親善協会メンバーによる「歓迎晩餐会」に出席を戴きご挨拶とご講演を賜りました。アトラクション”おわら踊り”には非常に感銘されていたご様子でした。

●三日目（４／２５）

立山アルペンルート経由で信濃大町よりＪＲにて帰京されました。

民間が一国を代表される大使ご一行をお迎えし随行するということは、とんでもなく大変なことです。綿密なスケジュール作成、ぬかりの無い準備、関係役員メンバーの皆様ご苦労様でした。
又、訪問しました団体・企業の皆様ご協力有難うございました。

平成22年4月23日　**富山市役所訪問**
右より、森市長、ホー大使、奥様。

ホー大使と立山登山

㈱中山塗装工芸社
代表取締役社長　**中山隆**

空は雲一つない快晴。春だというのに秋のように空気が澄んだ朝。

ホー・モニロット、ホー・ソチェット大使ご夫妻、チェウィ・ヴィチェット第一秘書、そして高田順一会長を乗せた車は、協会会員の人達に見送られ室堂に向かって富山第一ホテルを出発した。立山駅からは地鉄サービスの見角さんにガイド役をお願いし、出発してから２時間半ぐらいで室堂に到着した。

その日の室堂は『雪の大谷』の観光客で大にぎわいだった。さっそく散策ということで、雪の大谷へと向かう。人の背丈の何倍もある雪壁、その高さと同時に壁と壁の間を行きかうバスの光景を目にされて、大使は大変驚いていらっしゃるご様子だった。きっと通訳の谷野さんには

**「どうやって
この雪壁は造られたのでしょうか？」**

と、質問されていたのではなかろうか？とふと思った。

室堂散策を終え、立山トンネルトロリーバス、立山ロープウェイ、黒部ケーブルカーと幾つかの駅で乗り継ぎ、黒部ダムレストランで一般の観光客の人達と一緒に昼食をとる。そこで飲んだビールがとても美味しかった。

その後、信濃大町へと向かう。信濃大町の駅のホームでは、大使夫人にお別れの花束を贈呈し、３時５分に新宿へと向かう”あずさ２６号”は出発した。

無事、旅程を終了しホッとする。当日４月２５日（日）は好天に恵まれ、穏やかな春の日差しが快ち良く感じられた一日でもあった。

総会及び大使歓迎晩餐会等日程表

於第一ホテル：行事及び宿泊

実施日＝平成２２年４月２３（金）～２５日（日）

４月２３日＝富山県庁・富山市役所・北日本新聞社・阪神化成工業各訪問、富山県農業研究所見学座談。

４月２４日＝タイワ精機・富山県水墨美術館訪問。
午後より、**第３回総会及び大使歓迎晩餐会開催。**

４月２５日＝立山アルペンルート雪壁見学。
黒部湖見学、信濃大町経由帰京。

カンボジアの研修生紹介

カンボジア人、富山県第一号の企業入社
ブティ　モニラさんの経歴紹介

名　　前　VUTHY　MONYRATH（カンボジア人）
生年月日　1977年2月2日　カンボジア・プノンペンで誕生
（実父はポルポドの粛清の犠牲となり、母親に育てられた）
略　　歴
2002年7月・カンボジア王立プノンペン大学外国語学科英語科卒業
2006年4月・千葉大学大学院自然科学研究科博士課程入学
2010年3月・千葉大学大学院自然科学研究科博士課程卒業
2010年1月1日・㈱　タイワ精機に正社員として入社／研究部所属
2010年11月30日・研修期間終了
2011年1月・現地法人Taiwa Seiki (Cambodia)Corporationへ出向予定。

明日のカンボジアへ

タイワ精機　ブティ　モニラ

日本はとても素晴らしい国だと思います。何より便利かつ安全で、今日欲しいものは何でも手に入ります。私はカンボジアに生まれ、日本と比較してみると物質的には十分とは言えない場所に生まれ育ちました。また内戦の中、大変な生活をした時期もあります。しかし私は自分の生まれた国を誇りに思いますし、カンボジア人であることをとてもうれしく思っています。

今まで一生懸命勉強し、今年千葉大学を卒業しました。自分の生活の豊かさのために働くのは簡単なことですが、あえて自分の生まれ故郷に戻り、少しでもカンボジアが豊かになる手伝いをしたいと思い、帰国後も将来自分に何が出来るかを探し続けていました。カンボジアは内戦を経て、現在再建の途中なので、国を立て直すべく人材教育が非常に重要視されています。現在海外の地で勉強し、知識を蓄えているカンボジア人は国の為に一致団結する必要があると思います。

これは、終戦後の日本と共通するものがあるのではないでしょうか？日本も終戦直後は何もない状態でしたが、当時の日本人の努力が現在の豊かな日本を作っています。皆が力を合わせ努力を続けていけば、これからカンボジアはいい国になっていくと信じています。

今回カンボジアの復興に力を入れているタイワ精機とご縁があり、共に働くことになりました。利益だけを追求するのではなく、現地の農家の人たちの生活の豊かさを考えるタイワ精機の会長と出会い、同じ夢に向かって進んでいける事をとてもうれしく思っています。

この会社を通して、カンボジア産のお米を世界に発信して国際社会でのブランドネームの確立に向け、カンボジアの為に一生懸命頑張りたいです。

この仕事を通して、会社の発展は勿論のこと、カンボジアの農家の人たちの暮らしの向上にも貢献していけると確信しています。そして将来的には日本の持つ安心・安全な企業イメージをカンボジアに持ち込むことによって、これからのカンボジアでのビジネスの良いきっかけになればと考えます。

就職が決まり、現在は研修生として富山県に来ています。タイワ精機の本社で11月まで研修予定です。来日後はずっと関東地方で暮らしてきましたが、自然がたくさん残るここ富山県は水が豊かで、魚がおいしいです。何よりも周りの皆さんがとても優しく温かいので、僕は富山が好きです。

カンボジア王国と富山県の良い関係のために私は何か力になれることがあれば是非頑張りたいと思ってます。研修終りまでに富山の生活楽しみながら頑張ってたくさん仕事覚えて帰りたいと思います。

意気軒昂！日本とカンボジアの掛け橋となる！
タイワ精機で研修中です。

国際交流フェスティバル出展のご案内

日時	１１月１３日(土)PM1:00～１４日(日)全日
場所	駅前ＣｉＣ３Ｆにて。
出展	当カンボジア協会、日華親善協会、中国雲南省友好協会の合同出展。及び、同類似組織約３０協会。
主催	国際交流フェスティバル実行委員会。
共催	ＪＩＣＡ。とやま国際センター。富山市民国際交流センター。
後援	富山県。富山市。
入場	無料。
当日	中村政勝、石黒美和、＆３協会待機。

朗報第2弾

阪神化成工業様に研修予定のカンボジアの女性４名の方が、９月６日(奇しくも、私中村の誕生日)に無事茨城県に上陸されました。１ケ月間の受入れ機関研修の後、来県されます。当協会もまた国際化の波が押し寄せて来て、とても嬉しいですネ～。

編集後記

当親善協会は、平成２０年３月に発足して以来未だ日が浅いのに、２回の訪問と、２回の在日カンボジアア大使の来富と多彩に動いて来ましたが、遂に正社員や研修生の来日となりました。
まだまだ楽しい事がタンと有りそうですネ。

◆会員募集
この会報を利用して会員の募集をお願いします。
連絡先は、表紙右上窓枠欄に記載してあります。